

新潮文庫

三 四 郎

夏目漱石著



新潮社

さん し ろう  
三 四 郎

定価はカバーに表  
示してあります。

新潮文庫 草10D

昭和二十三年十月二十五日 発行  
昭和四十二年十月十日 五十七刷改版  
昭和五十年六月三十日 七十二刷

著 者 夏 目 漱 石

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株 式 新 潮 社

郵便番号 一六二  
東京都新宿区矢来町七一  
電話 業務部(〇三)(二六六)五一二一  
編集部(〇三)(二六六)五四二一  
振替東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付  
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

新潮文庫

三 四 郎

夏目漱石著

---

新潮社版



三  
四  
郎



うとうととして眼が覚めると女は何時の間にか、隣の爺さんと話を始めている。この爺さんは慥かに前の前の駅から乗った田舎者である。発車間際に頓狂な声を出して、馳け込んで来て、いきなり肌を抜いだと思つたら脊中に御灸の痕が一杯あつたので、三四郎の記憶に残っている。爺さんが汗を拭いて、肌を入れて、女の隣りに腰を懸けたまでよく注意して見ていた位である。

四 女とは京都からの相乗である。乗った時から三四郎の眼に着いた。第一色が黒い。三四郎は九州から山陽線に移つて、段々京大阪へ近付いてくるうちに、女の色が次第に白くなるので何時の間にか故郷を遠退く様な憐れを感じていた。それでこの女が車室に這入つて来た時は、何となく異性の味方を得た心持がした。この女の色は実際九州色であつた。

三 三輪田の御光さんと同じ色である。国を立つ間際までは、お光さんは、うるさい女であつた。傍を離れるのが大いに難有かつた。けれども、こうして見ると、御光さんの様なのも決して悪くはない。

唯顔立から云うと、この女の方が余程上等である。口に締りがある。眼が判明している。額が御光さんの様にだだっ広くない。何となく好い心持に出来上っている。それで三四郎は五分に一度位は眼を上げて女の方を見ていた。時々女と自分の眼が行き中る事もあつた。爺さんが女の隣へ腰を掛けた時などは、尤も注意して、出来るだけ長い間、女の様子を見ていた。その時女は

にこりと笑って、さあ御掛と云って爺さんに席を譲っていた。それからしばらくして、三四郎は眠くなって寐てしまったのである。

その寐ている間に女と爺さんは懇意になつて話を始めたものと見える。眼を開けた三四郎は黙つて二人の話を聞いていた。女はこんな事を云う。――

小供の玩具おもちゃはやはり広島より京都の方が安くつて善いものがある。京都で一寸用ちよつとがあつて下りた序ついでに、蝸薬師たぐしの傍そばで玩具を買つて来た。久し振で国へ帰つて小供に逢うのは嬉しい。然し夫の仕送りが途切れて、仕方なしに親の里へ帰るのだから心配だ。夫は呉くれに居て長らく海軍の職工をしていたが戦争中は旅順りょじゆんの方に行つていた。戦争が済んでから一旦帰つて来た。間もなくあつちの方が金が儲かると云つて、又大連だれんへ出稼でかせに行つた。始めのうちは音信たよりもあり、月々のものも几帳面けんめんと送つて来たから好かつたが、この半歳ばかり前から手紙も金もまるで来なくなつてしまつた。不実な性質たてではないから、大丈夫だけれども、何時までも遊んで食べている訳には行かないので、安否のわかるまでは仕方がないから、里へ帰つて待つて積りだ。

爺さんは蝸薬師も知らず、玩具にも興味がないと見えて、始めのうちは只はいはいと返事だけしていたが、旅順以後急に同情を催して、それは大いに気の毒だと云い出した。自分の子も戦争中兵隊にとられて、とうとう彼地あつちで死んでしまった。一体戦争は何の為にするものか解らない。後で景気でも好くなればだが、大事な子は殺される、物価ぶつしやは高くなる。こんな馬鹿気たものはない。世の好い時分に出稼でかせなどと云うものはなかった。みんな戦争の御蔭だ。何しろ信心が大切だ。生きて働いてゐるに違ない。もう少し待つていればきつと帰つて来る。――爺さんはこんな事を云つて、頻しばしばりに女を慰めていた。やがて汽車が留つたら、では御大事にと、女に挨拶を



して元気よく出て行った。

爺さんに続いて下りたものが四人程あったが、入れ易<sup>かわ</sup>って、乗ったのはたった一人しかない。固<sup>も</sup>から込み合った客車でもなかったのが、急に淋<sup>さび</sup>しくなった。日の暮れた所<sup>ところ</sup>為<sup>な</sup>かも知れない。駅夫が屋根をどしどし踏んで、上から灯<sup>ひ</sup>の点<sup>つ</sup>いた洋燈<sup>ランペン</sup>を挿<sup>さ</sup>し込んで行く。三四郎は思い出した様に前の停車場<sup>ステーション</sup>で買った弁当を食い出した。

車<sup>くるま</sup>が動き出して二分も立ったらうと思<sup>おも</sup>う頃例<sup>れい</sup>の女はすうと立って三四郎の横を通り越して車室の外へ出て行った。この時女の帯の色が始めて三四郎の眼に這入った。三四郎は鮎<sup>あひ</sup>の煮浸<sup>ニビタ</sup>しの頭<sup>かぶ</sup>を啣<sup>くわ</sup>えたまま女の後姿を見送っていた。便所に行<sup>い</sup>ったんだなと思<sup>おも</sup>いながら頻りに食<sup>く</sup>っている。

女はやがて帰<sup>かえ</sup>って来た。今度は正面が見えた。三四郎の弁当はもう仕舞掛<sup>しまがけ</sup>である。下を向いて一生懸命に箸<sup>はし</sup>を突<sup>つ</sup>込んで二口三口頬張<sup>ほくば</sup>ったが、女は、どうもまだ元の席へ帰らないらしい。もしやと思<sup>おも</sup>って、ひよいと眼を挙げて見るとやはり正面に立っていた。然し三四郎が眼を挙げると

三 同時に女は動き出した。只三四郎の横を通<sup>と</sup>って、自分の座へ帰るべきところを、すぐと前へ来て、身体<sup>からだ</sup>を横へ向けて、窓から首を出して、静<sup>しずか</sup>に外を眺<sup>なが</sup>め出した。風が強くあたって、鬢<sup>びん</sup>がふわふわする所が三四郎の眼に這入った。この時三四郎は空<sup>から</sup>になった弁当の折を力一杯に窓から放<sup>はな</sup>り出した。女の窓と三四郎の窓は一軒置の隣であった。風に逆<sup>さか</sup>らって抛<sup>な</sup>げた折の蓋<sup>ふた</sup>が白く舞戻<sup>ま</sup>った様に見えた時、三四郎は飛んだ事をしたのかと気が付いて、不途<sup>ふと</sup>女の顔を見た。顔は生憎<sup>あいにく</sup>列車の外に出<sup>で</sup>ていた。けれども女は静かに首を引<sup>ひ</sup>き込<sup>こ</sup>めて更紗<sup>さらさ</sup>の手帛<sup>ハンケチ</sup>で額<sup>ひたい</sup>の所を丁寧<sup>ていねい</sup>に拭<sup>ぬ</sup>ぎ始めた。三四郎はともかくも謝<sup>あや</sup>まる方が安全だと考<sup>かんが</sup>えた。

「御免なさい」と云<sup>い</sup>った。

女は「いいえ」と答えた。まだ顔を拭いている。三四郎は仕方なしに黙ってしまった。女も黙ってしまった。そうして又首を窓から出した。三四人の乗客は暗い洋燈の下で、みんな寐ぼけた顔をしている。口を利いているものは誰もいない。汽車だけが凄じい音を立てて行く。三四郎は眼を眠った。

しばらくすると「名古屋はもう直でしようか」と云う女の声が出た。見ると何時の間にか向き直って、及び腰になって、顔を三四郎の傍まで持って来ている。三四郎は驚いた。

「そうですね」と云ったが、始めて東京へ行くんだから一向要領を得ない。

「この分では後れますでしようか」

「後れるでしょう」

「あんたも名古屋へ御下で……」

「はあ、下ります」

三 この汽車は名古屋留りであった。会話は頗る平凡であった。只女が三四郎の筋向うに腰を掛たばかりである。それで、しばらくの間は又汽車の音だけになってしまふ。

次の駅で汽車が留まった時、女は漸く三四郎に名古屋へ着いたら迷惑でも宿屋へ案内してくれと云いだした。一人では気味が悪いからと云って、頻りに頼む。三四郎も尤もだと思つた。けれども、そう快く引き受ける気にもならなかつた。何しろ知らない女なんだから、頗る躊躇したにはしたが、断然断る勇氣も出なかつたので、まあ好い加減な生返事をしていた。そのうち汽車は名古屋へ着いた。

大きな行李は新橋まで預けてあるから心配はない。三四郎は手頃なズツクの革靴と傘だけ持つ

て改札場を出た。頭には高等学校の夏帽を被っている。然し卒業したしるしに徽章だけは挽ぎ取  
つてしまった。昼間見ると其処だけ色が新しい。後から女が尾いて来る。三四郎はこの帽子に対  
して少々極りが悪かった。けれども尾いて来るのだから仕方がない。女の方では、この帽子を無  
論ただの汚ない帽子と思っている。

九時半に着くべき汽車が四十分程後れたのだから、もう十時は過っている。けれども暑い時分  
だから町はまだ宵の口の様に賑やかだ。宿屋も眼の前に二三軒ある。ただ三四郎にはちと立派過  
ぎる様に思われた。そこで電気燈の点いている三階作りの前を澄して通り越して、ぶらぶら歩  
いて行つた。無論不案内の土地だから何処へ出るか分らない。只暗い方へ行つた。女は何とも云  
ずに尾いて来る。すると比較的淋しい横町の角から二軒目に御宿と云う看板が見えた。これは三  
四郎にも女にも相応な汚ない看板であつた。三四郎はちよつと振返つて、一口女にどうですと相  
談したが、女は結構だというんで、思い切つてずつと這入つた。上り口で二人連ではないと断る  
筈のところを、いらっしやい、——どうぞ御上り——御案内——梅の四番などのべつに喋舌ら  
れたので、已を得ず無言のまま二人共梅の四番へ通されてしまった。

下女が茶を持ってくる間二人はぼんやり向い合つて坐つていた。下女が茶を持って来て、御風  
呂をと云つた時は、もうこの婦人は自分の連ではないと断るだけの勇氣が出なかつた。そこで手  
拭をぶら下げて、御先へと挨拶をして、風呂場へ出て行つた。風呂場は廊下の突き当りで便所の  
隣にあつた。薄暗くつて、大分不潔の様である。三四郎は着物を脱いで、風呂桶の中へ飛び込ん  
で、少し考えた。こいつは厄介だとじゃぶじゃぶ遣つていると、廊下に足音がする。誰か便所へ  
這入つた様子である。やがて出て来た。手を洗う。それが済んだら、ぎいと風呂場の戸を半分開

けた。例の女が入口から、「ちいと流しましようか」と聞いた。三四郎は大きな声で、「いえ沢山です」と断った。然し女は出て行かない。却って這入って来た。そうして帯を解き出した。三四郎と一所に湯を使う気と見える。別に恥かしい様子も見えない。三四郎は忽ち湯槽を飛び出した。そこそこに身体を拭いて座敷へ帰って、座蒲団の上に坐って、少なからず驚いていと、下女が宿帳を持って来た。

三四郎は宿帳を取り上げて、福岡京都真崎村小川三四郎二十三年学生と正直に書いたが、女の所へ行って全く困ってしまった。湯から出るまで待ってれば好かつたと思つたが、仕方がない。下女がちゃんと控えている。已を得ず同県同郡同村同姓花二十三年と出鱈目を書いて渡した。そうして頻りに団扇を使つていた。

四 やがて女は帰つて来た。「どうも、失礼致しました」と云つている。三四郎は「いいや」と答えた。

三 三四郎は革靴の中から帳面を取り出して日記をつけ出した。書く事も何もない。女がいなければ書く事が沢山ある様に思われた。すると女は「一寸出て参ります」と云つて部屋を出て行った。三四郎は益々日記が書けなくなった。何処へ行ったんだらうと考え出した。

そこへ下女が床を延べに来る。広い蒲団を一枚しか持つて来ないから、床は二つ敷かなくては不可ないと云うと、部屋が狭いとか、蚊帳が狭いとか云つて埒が明かない。面倒がる様にも見える。仕舞には只今番頭が一寸出ましたから、帰つたら聞いて持つて参りましょうと云つて、頑固に一枚の蒲団を蚊帳一杯に敷いて出て行った。

それから、しばらくすると女が帰つて来た。どうも遅くなりましてと云う。蚊帳の影で何かし

ているうちに、がらんがらんという音がした。小供に見舞の玩具が鳴ったに違ない。女はやがて風呂敷包を元の通りに結んだと見える。蚊帳の向うで「御先へ」と云う声がした。三四郎はただ「はあ」と答えたままで、敷居に尻を乗せて、団扇を使っていた。いっそのままで夜を明かしてしまおうかとも思った。けれども蚊がぶんぶん来る。外ではとても凌ぎ切れない。三四郎はついと立って、革靴の中から、キャラコの襯衣と洋袴下を出して、それを素肌へ着けて、その上から紺の兵児帯を締めた。それから西洋手拭を二筋持ったまま蚊帳の中へ這入った。女は蒲団の向隅でまだ団扇を動かしている。

郎 「失礼ですが、私は疝性で他人の蒲団に寝るのが嫌だから……少し蚤除の工夫を遣るから御免なさい」

四 三四郎はこんな事を云って、あらかじめ、敷いてある敷布の余っている端を女の寐ている方へ向けてぐるぐる捲き出した。そうして蒲団の真中に白い長い仕切を拵えた。女は向うへ寝返りを打った。三四郎は西洋手拭を広げて、これを自分の領分に二枚続きに長く敷いて、その上に細長く寝た。その晩は三四郎の手も足もこの幅の狭い西洋手拭の外には一寸も出なかった。女とは一言も口を利かなかった。女も壁を向いたまま凝として動かなかった。

夜はようよう明けた。顔を洗って膳に向った時、女はにこりと笑って、「昨夜は蚤は出ませんでしたか」と聞いた。三四郎は「ええ、難有う、御蔭さまで」と云う様な事を真面目に答えながら、下を向いて御猪口の葡萄豆をしきりに突つき出した。

勘定をして宿を出て、停車場へ着いた時、女は始めて関西線で四日市の方へ行くのだと云う事を三四郎に話した。三四郎の汽車は間もなく来た。時間の都合で女は少し待合せる事となった。

改札場の際まで送って来た女は、

「色々御厄介になりました、……では御機嫌よう」と丁寧に御辞儀をした。三四郎は革靴と傘を片手に持ったまま、空いた手で例の古帽子を取って、只一言、

「さよなら」と云った。女はその顔を凝と眺めていた、が、やがて落付いた調子で、

「あなたは余つ程度胸のない方ですね」と云って、にやりと笑った。三四郎はプラット、フォームの上へ弾き出された様な心持がした。車の中へ這入ったら両方の耳が一層熱り出した。しばらくは凝つと小さくなっていた。やがて車掌の鳴らす口笛が長い列車の果から果まで響き渡った。

郎

列車は動き出す。三四郎はそつと窓から首を出した。女はとくの昔に何処かへ行ってしまった。

四

も三四郎の拳動に注意する様なものは一人もない。只筋向うに坐った男が、自分の席に帰る三四郎を一寸見た。

三

三四郎はこの男に見られた時、何となく極りが悪かった。本でも読んで気を紛らかそうと思つて、革靴を開けて見ると、昨夜の西洋手拭が、上の所にぎっしり詰っている。そいつを傍へ掻き寄せて、底の方から、手に障った奴を何でも構わず引出すと、読んでも解らないベーコンの論文集が出た。ベーコンには気の毒な位薄っぺらな粗末な仮綴である。元来汽車の中で読む見もの、大きな行李に入れ損なつたから、片付ける序に提革靴の底へ、外の二三冊と一所に放り込んで置いたのが、運悪く当選したのである。三四郎はベーコンの二十三頁を開いた。他の本でも読めそうにはない。ましてベーコンなどは無論読む気にならない。けれども三四郎は恭しく二十三頁を開いて、万遍なく頁全体を見廻していた。三四郎は二十三頁の前で一応昨夜の御浚を

する気である。

元来あの女は何だろう。あんな女が世の中に居るものだろうか。女と云うものは、ああ落付いて平気でいられるものだろうか。無教育なのだろうか、大胆なのだろうか。それとも無邪気なのだろうか。要するに行ける所まで行って見なかつたから、見当が付かない。思い切つてもう少し行つて見ると可かつた。けれども恐ろしい。別れ際にあなたは度胸のない方だと云われた時には、喫驚した。二十三年の弱点が一度に露見した様な心持であつた。親でもああ旨く言い中てるものではない。……

郎 三四郎は此処まで来て、更に悄然てしまった。何処の馬の骨だか分らないものに、頭の上から

ない位打された様な気がした。ペーコンの二十三頁に対しても甚だ申訳がない位に感じた。

四 どうも、ああ狼狽しちや駄目だ。学問も大学生もあつたものじゃない。甚だ人格に関係して行く。もう少しは仕様があつたらう。けれども相手が何時でもああ出るとすると、教育を受けた自分には、あれより外に受け様がないとも思われる。すると無暗に女に近付いてはならないと云う訳になる。何だか意気地がない。非常に窮屈だ。まるで不具にでも生れたようなものである。けれども……

三 三四郎は急に気を易えて、別の世界の事を思出した。——これから東京に行く。大学に這入る。有名な学者に接触する。趣味品性の具つた学生と交際する。図書館で研究をする。著作をやる。世間で喝采する。母が嬉しがる。と云う様な未来をだらしなく考えて、大に元気を回復して見ると、別に二十三頁の中に顔を埋めている必要がなくなつた。そこでひよいと頭を上げた。すると筋向うにいたさっきの男がまた三四郎の方を見ていた。今度は三四郎の方でもこの男を見返

した。

髭を濃く生している。面長の瘠ぎすの、どことなく神主じみた男であった。ただ鼻筋が真直に通っている所だけが西洋らしい。学校教育を受けつつある三四郎は、こんな男を見るときつと教師にしてしまふ。男は白地の紺の下に、丁重に白い襦袢を重ねて、紺足袋を穿いていた。この服装から推して、三四郎は先方を中学校の教師と鑑定した。大きな未来を控えている自分から見ると、何だか下らなく感ぜられる。男はもう四十だろう。これより先もう発展しそうにもない。

男はしきりに煙草をふかしている。長い煙を鼻の穴から吹き出して、腕組をした所は大変悠長に見える。そうかと思うと無暗に便所か何かに立つ。立つ時にうんと伸をする事がある。さも退屈そうである。隣に乗合せた人が、新聞の読み殻を傍に置くのに借りて見る気も出さない。三四郎は自ら妙になって、ペーコンの論文集を伏せてしまった。外の小説でも出して、本気に読んで見ようとも考えたが面倒だから、已めにした。それよりは前にいる人の新聞を借りたくなった。生憎前の人はぐうぐう寐ている。三四郎は手を延ばして新聞に手を掛けながら、わざと「御明きですか」と髭のある男に聞いた。男は平気な顔で「明いてるでしょう。御読みなさい」と云った。新聞を手を取った三四郎の方は却って平気でなかつた。

開けて見ると新聞には別に見る程の事も載っていない。一二分で通読してしまつた。律義に覺んで元の場所へ返しながら、一寸会釈すると、向うでも軽く挨拶をして、

「君は高等学校の生徒ですか」と聞いた。

三四郎は、被っている古帽子の徽章の痕が、この男の眼に映つたのを嬉しく感じた。「ええ」と答えた。



「東京の？」と聞返した時、始めて、

「いえ、熊本です。……然し……」と云ったなり黙ってしまった。大学生だと云いたかったけれども、云う程の必要がないからと思つて遠慮した。相手も「はあ、そう」と云ったなり煙草を吹かしている。何故熊本の生徒が今頃東京へ行くんだとも何とも聞いてくれない。熊本の生徒には興味がないらしい。この時三四郎の前に寐ていた男が「うん、成程」と云った。それでいて慥に寐ている。独言でも何でも無い。髭のある人は三四郎を見てにやにやと笑つた。三四郎はそれを機会に、

郎 「あなたは何方へ」と聞いた。

四 「東京」とゆっくり云ったぎりである。何だか中学校の先生らしく無くなつて来た。けれども三等へ乗っている位だから大したものではない事は明らかである。三四郎はそれで談話を切り上げた。髭のある男は腕組をしたまま、時々下駄の前歯で、拍子を取つて、床を鳴らしたりしてゐる。余程退屈に見える。然しこの男の退屈は話しながらない退屈である。

三 汽車が豊橋へ着いた時、寐ていた男がむっくり起きて眼を擦りながら下りて行つた。よくあんなに都合よく眼を覚ます事が出来るものだと思つた。ことによると寐ぼけて停車場を間違えたんだらうと氣遣いながら、窓から眺めていると、決してそうでない。無事に改札場を通過して、正気の人間の様に出て行つた。三四郎は安心して席を向う側へ移した。これで髭のある人と隣り合せになつた。髭のある人は入れ換つて、窓から首を出して、水蜜桃を買っている。

やがて二人の間に果物を置いて、

「食べませんか」と云つた。